

「世界に衝撃を加えたかったスーちゃん」

むかしむかし、ではなく、比較的最近のお話、あるところが変わった男の子がいました。

その子の名前はスーちゃんと言います。

スーちゃんは生まれる前から複雑な事情を抱えていました。

スーちゃんの実のお父さんとお母さんは大学生で予期しないタイミングでお母さんのお腹の中にスーちゃんを授かりました。

スーちゃんのお母さんのお父さん（スーちゃんのお爺さん）は、とても厳しい人だったので、大学生であるお母さんがスーちゃんを育てることは難しいと考え、生まれたらすぐに養子に出すことを決めてしまいました。

スーちゃんのお母さんは、従うしかありませんでした。

しかし養子に出す条件を一つだけ提示しました。

スーちゃんが大きくなったら、必ず高等教育（大学進学）を受けさせるという条件でした。

スーちゃんは、生まれる前に子どもに恵まれない夫婦に養子縁組となることが決まりました。

養子縁組先の夫婦は、決して裕福な家庭ではありませんでしたが、実直で真面目な夫婦でした。

養父にあたる人は、物作りの名人で職人さんでした。

スーちゃんは生まれてからスクスクと物おじしない悪戯好きの男の子に成長してい

きました。

スーちゃんが五歳になった時に、近所の子たちと遊んでいる時に、近所の子から突然、スーちゃんは養父母さんの本当の子どもではないことを聞かされてしまいました。恐らく近所の子は自分の親から聞いたことをなんの考えもなしに伝えてしまったのでした。

たった五歳でしたが、スーちゃんはとても感性が鋭い利発な子どもでもあったので、子どもながらとても大きなショックを受けました。

「もしかしたらぼくは、実の親から必要とされなかった子ども？」

という疑念を持って、悶々とした気持ちを抱きながら子ども時代を送ることになりました。

それでもスーちゃんの養父母さんたちは、本当のわが子以上に愛情をスーちゃんに注ぎ大切にスーちゃんを育てました。

スーちゃんの養父さんは職人さんで、とても腕がよくスーちゃんにとっては憧れの養父さんでした。

養父さんのこだわりはモノづくりにおいて、たとえ外から見えない内部の部分でも手抜きをしないで美しく作り上げるということを信念にしていました。

そんな強いこだわりを持っていた養父さんを尊敬し、スクスクと育っていきました。学校にあがるとあまりの利発さに学年を飛び級するぐらいに勉強ができてしまいま

した。

ただ飛び級で進級したクラスでは、年上の同級生からいじめを受けるようになりました。

そのことを見かねた養父母は、スーちゃんのために転校させ、より好ましく育つことが出来る環境を整えてくれました。

そんな温かく愛情深く育ててくれる育ての親の両親をスーちゃんはとても尊敬していたので、「必要とされない子ども？」という存在を脅かすほどの葛藤に押しつぶされることでぐれたり非行に走ったりすることはありませんでした。

中学生、高校生になると、わんぱく者のスーちゃんは、悪戯三昧過ぎて養父母さんを困らせることもありました。

それでも愛情が揺らぐことのない養父母の下で、大学に進学することができました。

ただスーちゃんが進学した大学は、私立大学の中でも学費の大変高い大学でしたので、スーちゃんにとっては、経済的な負担を養父母さんにかけていることに強い負い目を感じていました。

とうとう養父母さんに相談もなく、大学を退学してしまいました。

スーちゃんは、二十歳前後の多感な年ごろに差し掛かり、自分は本当の親に望まれなかった必要とされない存在であるというコンプレックスが日に日に大きくなり、圧倒される程の悩みになってしまいました。

そしてそういう押しつぶされそうな悩みを解決するために、インドに旅行し聖者に会って修行をすることを思いつきました。アルバイトをしてお金を溜め、二十歳の頃、インドに旅経ちました。

しかしインド中を旅しても、夢に描いたような聖者には出会うことができませんでした。

失意のうちにヒマラヤの山小屋に泊っていたらその山小屋に一冊の本が置いてありました。

分厚いその本は、あるヨガの聖者が書いた自叙伝でした。

スーちゃんは食べるようにその本を読みました。その本の著者自身も子どもの頃、最愛の母親と死別するという大変辛い体験に押しつぶされないよう真剣に聖者になることを目指した人生を送ったことがわかりました。

その本からスーちゃんは直観的に何かを得ることができたようでした。

インドへの旅行を終えてから、東洋の神秘思想に魅せられ、禅宗のお坊さんから座禅を習い始めました。

スーちゃんの友人たちは、インドから帰ってきたスーちゃんが明らかにそれまでのスーちゃんとは別の次元に変わったと感じるほどでした。

帰国すると退学した大学に忍び込み、自分の興味のある授業（宗教や哲学）だけを受けて過ごしました。

大学側も寛容でそのようなスーちゃんを追い出すことはしませんでした。

生活費も尽きたため、友人の寮をあちこちと居候をしたり、資源ごみを拾い生計を立てていました。

そしてインド帰りの影響か、入浴せず裸足で大学の構内を歩き回るスーちゃんの姿を周りの人たちが見かけられるようになりました。

そのような奇怪な行動をしていたスーちゃんでしたが、共通の興味を持つ親友と出会うことでスーちゃんの人生は大きく変わっていきます。

親友と結託して大きな悪戯をしましたが、やがて世の中をあとと言わせる製品を作ることを決意しました。

周りの人たちは、はじめの内は誰も取り合ってくれませんが、協力してくれる友人仲間のおかげで製品を完成することができました。

友人の家のガレージで作り上げた製品は、スーちゃんのこだわりで外から見ることのできない部分まで美しく作り上げた大変凝った製品でした。

やがてその製品を改良の上、改良を続けるうちに、世間から注目を浴びる製品を作りあげることができました。

その製品が世界的にヒットし、スーちゃんとその友人は会社を設立しました。

ただ会社を運営するマネジメントには慣れていないこともあって、幾度となく失敗を繰り返しました。

そこで、よその大手の会社からスカウトした社長さんを自分たちの会社の社長さんになってもらいました。

はじめのうちはその社長さんともうまくいっていましたが、スーちゃんのやり方に強引で傲慢なところが出てしまったことが原因で、なんと自分がスカウトして連れてきた社長さんの画策でスーちゃんは会社を首になってしまいました。

また私生活では、若い頃から交際してい

た彼女との間に女の子が生まれました。

しかしなかなかその女の子を認知しようとしなかったり、冷たくあたってしまいうこともありました。

ただその反面、認知していない娘の名前を新製品の名前（リサ）をつけるという奇妙な行動もとったりしました。

まるで自分自身の生い立ちについての葛藤を、自分の娘との間で表現しているかのようでした。

その後、スーちゃんは自分の本当の親について調べました。

両親が大学生の頃に自分が生まれ里子に出されたこと、その後、その両親の間にはスーちゃんの妹が生まれたことを調べ上げていました。

ただ育ての親の養母さんの気持ちも思いやり、実の母親に会うことは我慢していませんでした。

自分が作った会社を首になったスーちゃんは新しい会社を設立しました。

また子供向け映画を作る会社の運営にも手を出し、空前の大ヒットするような会社にするなどの異才ぶりを発揮しました。

スーちゃんを首にした会社はその後、業績がみるみる悪化し、あまりの業績不振にスーちゃんを呼び戻すことになりました。

スーちゃんはほとんど無報酬であることを条件に自分がつくった会社に戻ることにしました。

スーちゃんは大好きな他社の製品の研究や工場見学を重ねる中で、独自の全く他の人が考え付かなかったアイデアを商品化し

ました。

見えないところまで細部にこだわり美しい製品をどんどん作り上げました。

それらの製品は禅の精神や日本庭園からヒントをもらったような画期的な製品でした。

それまでの会社経営や商品開発の常識にとられない製品は、すべての人の可能性を引き出すような製品ばかりで価格は高価でも誰もが欲しがるような製品で世界の市場を改革するような画期的な製品でした。

スーちゃんの実のお父さんは、息子の活躍をテレビで見っていました。

その頃、実のお父さんは実のお母さんと離婚していました。

料理店を経営していた実のお父さんの店にある日、スーちゃんが訪れました。

実のお父さんは、名乗り出る事は決していないことを決めていたので挨拶を交わすことすらありませんでした。そしてその関係はスーちゃんが亡くなるまで変わることはありませんでした。

スーちゃんは自分自身の会社を見事に再建し、業績もみるみるうちに回復し世界でもっとも知られた経営者になりました。

しかし長年のハードワークがたたって膵臓癌にかかっていました。

スーちゃんは、養母さんが病気でお亡くなりになった後に実のお母さんとの再会を果たしました。

その後、スーちゃんは膵臓癌の闘病生活を送り、関係が難しかったリサさんと京都へ旅行をしたりして関係回復ができるよう

になりました。

スーちゃんの夢は、世界をあとと言わせるような製品をこの世に贈りたい、そして全ての人たちのパフォーマンスが向上するような世界に衝撃を与えるような誰にも必要とされる製品を届けたい、というハングリーな想いから出たものでした。

その夢の背景には、五歳の頃、突然、近所の子に自分が養父母の本当の子どもではないことを聞いて、自分自身がこの世から必要とされていない存在、とるに足りない存在ではないかという強い葛藤を跳ね返すためのものだったのかも知れません。

スーちゃんはいつも

「ハングリーであれ、愚か者であれ」と口癖のように言い続けていました。

スーちゃんとは、アップル社を創立したスティーブ・ジョブズさんです。

彼が大成功に一躍力を貸した映画とは『トイストーリー』でした。

「愚か者であり続けた」スーちゃんは、世の中の常識・会社運営・営業戦略に囚われない、直観的な発想を大事にしました。

彼の禅の師匠は日本人であり、彼が最も影響を受けて毎年読み返した本とは、『あるヨギの自叙伝』というパラマハンサ・ヨガナンダという世界にヨガを広めた聖者が書いた本です。

日本では大谷翔平選手が読んでいる本です。

「世界に衝撃を与える程の度肝を抜かす

ことをしでかしたい」という思いの裏には、  
生まれる前から里子に出されることになっ  
ていた特異な運命の上に育った彼の「かな  
しみ」が原動力になっていたのかも知れま  
せん。

(おしまご)